

夏の家、冬の家

納谷 学+納谷 新
MANABU NAYA + ARATA NAYA



東面全景

能代の住宅

設計：納谷学+納谷新／納谷建築設計事務所



上—2階台所から居間を見る。建具を閉じた「冬の家」の状態
下—廊下から居間を見る。建具を開放した「夏の家」の状態



左—1階和室
右—洗面室と浴室



能代は秋田県の北西部、日本海側に位置する。海岸線沿いには、日本海から吹く強い風と砂から町を守るため、江戸時代に植林された松の砂防林がある。風の強さは今も変わらず、夏は心地良い風だが、冬は雪こそ少ないが鉛色の雲に覆われ、体感気温の低い日々が続く。そのため能代では、開口部が小さく、壁の断熱性能に重きを置いた住宅が多い。当然、冬季は日射量が少ないため室内は暗くなりがちで、開放的で明るい住宅の実現は難しい。

われわれは、住宅の性能を外壁一枚の断熱性能や設備機器に頼るのではなく、建物全体のプランニングにより解決したかった。なぜなら、それこそが古典的だが建築の持っている力強い解答と考えるからだ。そこでまず、プランの二重化を考えた。外側（室内の外周寄り）と内側（室内の中央）の境界によって夏と冬の気候をコントロールできるのではないかと。計画敷地は町の中のため、どうしてもグランドレベルよりも2階レベルの方が採光をとりやすい。われわれは、日常生活のほとんどを2階で過ごせるようにして、1階には、駐車場の他に使用頻度の少ない寄り合いのための和室などを配置した。そして、1階部分は防犯と雪の

影響を考慮して開口部を極力控え、逆に2階は建物の外周全体にペアガラスを回して開放性の高い空間とした。更に、二重化したプランの室内環境を整えるために、2階の外寄りのスペース（回廊）の床をスノコ状にして上下階の風と光の通り道を確認した。

しかし、外側の空間を動線としてのみ使い、内側だけで生活するには、少し大げさな仕掛けに思えた。そこで、外側の壁が直接外気に接するハードな境界だとしたら、内側の壁はソフトな境界として考えられないか。つまり、建具などの可動する境界により光や風を通したり、内側と外側の関係を季節や使い勝手、もっと繊細に扱うなら、時間帯によって自在に使い分けられる境界として機能させたかった。

夏には内側の境界を開放し、外側の壁の領域まで広がりを持たせ、スノコの床からの風抜けの良い、開放性の高い「夏の家」として使われる。冬には内側の境界を閉じて柔らかい光にあふれた、コンパクトで静かな「冬の家」として使われる。コンパクトな生活は光熱費を抑え、クライアントの行動に負担を掛けない。浴室やトイレは住宅の中央に配置されることにより、冬の寒さから解放され、柔

らかい境界による明るい浴室となる。そしてわれわれは、年老いたクライアント夫婦の明るい穏やかな生活を切に望んでいる。*

なや・まなぶ—建築家・納谷建築設計事務所／1961年生まれ。1985年、芝浦工業大学卒業。1985～87年、黒川雅之建築設計事務所。1987～88年、野沢正光建築工房。1993年から納谷新と納谷建築設計事務所を共同主宰。現在、昭和女子大学、芝浦工業大学大学院非常勤講師。
なや・あらた—建築家・納谷建築設計事務所／1966年生まれ。1991年、芝浦工業大学卒業。1991～93年、山本理顕設計工場。1993年から納谷学と納谷建築設計事務所を共同主宰。現在、昭和女子大学、東海大学非常勤講師。
主な作品：s-tube（1999）、宝珍楼（2001）、新井の集合住宅（2003）、1227号室（2003）、多摩川の住宅（2005）、木挽町御殿Project 6F（2005）など。

■建築概要

名称：能代の住宅
所在地：秋田県能代市
家族構成：夫婦
敷地面積：449.52㎡
建築面積：88.81㎡
延床面積：152.78㎡
規模：地上2階
構造：木造
工期：2004.11～2005.4
設計：納谷学+納谷新／納谷建築設計事務所
施工：成田建業

●INAX使用商品●床タイル（洗面・浴室）：サーモタイル ミルキーDX、壁タイル（洗面・浴室）：ミスティキラミックブライト釉、水栓金具（キッチン）：オールインワン浄水栓

